

三重県
青少年赤十字
高等学校
連絡協議会に
ついて

県内の青少年赤十字に加盟する
高校生の皆さんは、三重県青年
赤十字高等学校連絡協議会を組織
して活動を行っています。定例会
は年間三回開催し、他に必要に応
じて開催することになっています。
この協議会では二名の高校生リー
ダーが中心となって、協議会の司
会進行をはじめ協議会が行う青少
年赤十字の事業を進めています。
リーダーは、例年三月に日本赤十
字社が主催する青少年赤十字スタ
ディー・センター（近年は四泊五
日で実施）に参加して赤十字及び
青少年赤十字への理解と実践力を
学び、三重県支部の夏の青少年赤
十字リーダーシップ・トレーニング
グ・センター（トレセン）から翌年
夏のトレセンまでリーダーとして
活動します。

私が県リーダーとして選ばれた
とき、とても不安でした。しかし同
時に少し楽しみでもありました。一
年生の頃に東北へ行ったり、青少
年赤十字スタディー・センターに
参加したり、様々な活動がリーダ
ーになることへの後押しをしてく
れました。

リーダーになって初めての仕事
が三重県青少年赤十字高等学校連
絡協議会でした。慣れない司会・
進行に苦戦しましたが、森内さん
と助け合いながら数をこなしてい
くうちに上達していききました。そ
してそこであるような学校の方か
ら自分の学校では行っていない活
動やその学校ならではの活動のこ
とを聞き、とても参考になりました。

また、「令和元年度青少年赤十
字のつどい」では先生方や三重県
支部の方に手助けしていただきな
がら、自分たちで企画を決めまし
た。令和元年は日本赤十字社三重
県支部創立百三十周年ということ
で、それにふさわしく、みんなが楽
しんで交流したり、赤十字のこと
を学んでもらうためたくさん考え
ました。森内さんとも話し合い、参
加校の部長さん方とも連絡を取り
ながら今までとは違うつどいを完
成させていきました。そしてつど
いの当日、いろいろな部分が少し
あったものの、みんなが楽しそう
に交流しているのを見て、ほっと
しました。一日という短い時間で
したが、大勢の人をまとめる大変
さと伝える難しさをあらためて学

青少年赤十字活動に
取り組んで

三重県立木本高等学校

大川 真愛



び、今までにない達成感を感じる
ことができました。
三年生になってからは新型コロナウイルスの影響で一度もリーダ
ーとしての活動をせずに次の代に
交代することになってしまいました
。毎年行われていた青少年赤十
字リーダーシップ・トレーニング・
センターがなくなつたことが一番
の衝撃でした。トレセンはリーダ
ーの仕事の集大成なので、これを
経験せず終わることは今でも不完
全燃焼のままです。このような状
況になってから、何かしたくても
何もすることができないもどかし
さを常に感じていました。しかし、
今でもできなくても、自分がJRC
部として、リーダーとして活動
し学んで感じたことは、今後絶対
に役立つときが来ると信じていま
す。とても充実した貴重な経験を
させていただき、本当にありがと
うございました。

私の考えるリーダー像

三重県立白子高等学校
森内陽菜



私がボランティア部に入部した
理由は自分自身を変えたかったか
らです。当時、人と話すことが全
くできなかった私が何故生徒リーダ
ーに推薦して頂けたのかは今でも
分かりませんが、この経験でリー
ダーの仕事の大変さ、自分で考え
ることの難しさ等、様々なことを
学ぶことができました。
特に大変だったことはMie M
u（三重県総合博物館）で行われ
た「令和元年度青少年赤十字のつど
い」でした。このつどいは日本赤十
字社三重県支部創立百三十周年を



青少年赤十字

第28号

発行者
日本赤十字社
三重県支部
発行
令和三年三月

青少年赤十字（JRC）と私

元三重県青少年赤十字賛助奉仕団 森倉啓之

はるかに「懐かし」

私は未だ30歳の頃、担任をして
いた素朴で素直な僻地の子ども達
を自ら気づき・考え・主体的に行
動する子どもに育てるにはどうす
ればよいか悩んでいました。ある
日、三重県教育委員会が主催する
キャン・講習会の夜、松阪市立殿
町中学校の先生から話を聞き、青
少年赤十字（JRC）の活動を知る
こととなったのです。早速、殿町中
学校を訪問し、さらに詳しく活動
の様子を見せていただきました。
そして、これが私が求めていたも
のであることに気づいたのです。

「懐かし」

赤十字の父と呼ばれるアンリ
ー・デュナンが、戦場で人類は皆
兄弟だー（all are brothers）と
叫び、敵味方の区別無く救護にあ
たったことが発端となり赤十字社
が設立されました。
この史実を知ったとき、平和を
愛し、世界の子とも達と手をつ
なぎ、自分が心に描いていたこと
を子ども達と実践できると考えま
した。そして、「健康・安全」「奉仕」
「国際理解・親善」の三大目標を掲
げ活動を行っている青少年赤十字
は素晴らしい活動であり、自分も
この活動を実践してみたいと思
いました。

早速校長先生に青少年赤十字活
動を校内で取り組みたいと申し出
ました。校長先生は「余計なものを
この学校に持ち込まないで欲しい
。」と言いつて取り上げてくれませ
んでした。私は表向き野外活動フ
ラブを立ち上げ、その名の下に集
まってきた子ども達と飯盒炊飯を
楽しんだり、特別養護老人ホーム
を慰問したり活動を始めました。
ある日の職員会議で、「森倉先生
がある年に一生懸命子ども達と取
り組んでいるのだから、部活動の
一つとして認めてあげたらー」と
提案があり、晴れてJRCクラブ
が誕生したのでした。勢いついた
私は、多くの先生方のご協力を得
て地元の公民館や紀和町のある中



「実行」

ある日、三重県赤十字青年奉仕
団で活躍している教える子の一人が
ネパールへ行くとの情報が入り、
「このチャンス逃しては」と思い、
子ども達と相談の上、ギフトボッ
クスや交換アルバムを作成し、直
接ネパールの子ども達に届けてい
たきました。このことは、日頃、
文化祭などで「ネパールの子ども
達に綺麗な水」というキャンペ
ーンを行い、古切手集めなど地域
住民にも協力を求めてきた運動を
より身近なものにするためにも大
きな効果があったと思います。返
礼としてネパールの子ども達のア
ルバムや民芸品が届けられた時の
子ども達の喜びはたいへんなもの
でした。

記念する集いだったので、これま
どと異なる環境で、例年と同じよ
うに多くの人に私たちのことを知
ってもらうにはどうしたら良いの
だろうかと一から考えていくのは
大変でした。何度も顧問の先生に
相談したり、先輩や部員にも準備
を手伝ってもらったりしました。
準備をしっかりとらなければ当
日は緊張しながらも落ちついて運
営することができました。行事とい
うのは、多くの人の協力があつて
初めて成功するものだと思ってい
ることができました。

しかし、私には残念に思ってい
ることもあります。それは今年に
入ってから何も活動ができなかつ
たことです。新型コロナウイルス
が流行し、今年行われるはずだっ
た三重県青少年赤十字高等学校連
絡協議会、青少年赤十字リーダ
ーシップ・トレーニング・センター等、
全ての行事がオンライン開催や中
止となり、そのまま任期を終える
ことになりました。仕方ないとい
えはそれまでのですが、私の中
で最後の行事であったトレセンが

「手洗いチェッカー」を貸し出します。

感染症の拡大防止対策の普及
を図るため、日本赤十字社三重
県支部有会様から贈呈してい
ただいた、自分の手洗い方法、洗
い残し部分の確認が出来る「手
洗いチェッカー」の貸し出しを
行っています。



貸出費用は無料です。貸出を
希望する学校・園は、事前に電話
で空き状況を確認のうえ、利用
日の1週間前までに使用申請書
（様式1）を提出してください。貸
出台数は1回につき1台です。貸
出期間は原則として14日間以内
です。詳細は三重県支部へお問
い合わせください。



お問い合わせ先：電話 059-227-4145 組織振興課

開かれた学校を目指して

この頃（僻地の学校ならでは
活動ができないか？）といういろ
考えた結果、地域の人々とのふれ
あいを大切にしたい活動を目指し
ました。生徒たちは県トレセンで
学んだ「健康・安全」「奉仕」「国
際理解・親善」を題材にJRCコー
ナーを講堂に設け、地域ぐるみの
文化祭を企画しました。そのため
生徒たちは地域の人々とのふれあ
いを求め、文化祭の案内状の配布
やバザーへの協力依頼のチラシを
持って一軒一軒足を運んだりしま
した。このような取り組みを通し
て、生徒たちは今までにない多く
の体験をし、百五十名を超える参
加をえて、文字どおり地域ぐる
の文化祭にすることができました。
「文化祭へ来るのは楽しみや！
また来年もやっ！」といった地
域の人の声。「あんなところに独
りぼっちの老人が住んでいるとは知
らなかつた。」「日頃から話したこ
とのない地域の人々と話し合えて
嬉しかった。」「地域の老人からお
礼の手紙をいただいたとても感激
した。」と生徒の感想もあり、学校
は生徒と教師だけの閉ざされた社
会であつてはならないとつくつく
思いました。

ポンポコ学園誕生

二十数年前、三十六年の教師生
活に幕を閉じ、寂しい日々を過こ
している時ふと思つたことは、こ
れからは今まで野外活動や青年
赤十字活動など数多くの体験を通
して得た様々なことを地域の手に
も達にお返しすることはできない
かと思いました。友人と相談し青
少年赤十字の活動を取り入れた
「ポンポコ学園」を立ち上げました。
主な活動は「気づき・考え・ふん
切り・実行」を旗印に、奉仕活動・
老人ホーム慰問・道行く人々やド



中止となったことで、以前から計
画していたことを実行できず、不
完全燃焼の状態で終わる結果とな
りました。しかし、学んだこともあ
りました。それは、制限された中で
もいつも通りの活動をする方法を
考えたり、思い切つて新しいこと
にチャレンジするということです。
この経験もプラスにとらえていき
たいです。

世の中にはリーダーという立場
の人は沢山いると思います。その
中で私が思う良いリーダーとは、
ただ指示を出すだけではなく、常
に先見をして失敗することを想定
しながら企画し、周りをよく見て
行動できるリーダーです。私は青
少年赤十字という活動を通して、
様々な方と出会い、様々な考え方
を知ることができました。そして
人の前で話す機会も多かったこと
でクラスで発表する時も自信を持
てるようになりました。この経験
で学んだことを多くの人に広げて、
進学先でも充実した学校生活を過
ごしていきたいと思っています。

終わりに

私は自分のささやかな体験を通
じて感じたことは、よいと思つた
ことは即実行すること、それには
チャンスを見逃さないことが大切
ではないかと思っています。
気が付けば青少年赤十字（J
RC）と出会つてから五十数年の
歳月が流れていました。教育者と
しての私の人生のすべてが青年
赤十字と共に歩んでこれたことに
感謝しています。

教育現場を離れて二十数年経つ
私には、今の教育現場の様子は分
かりません。しかし、子ども達が伸
び伸びと自発的に行動を起こすた
めにも、この青少年赤十字の活動
は教育現場において欠かせない活
動であるとお自分の体験を通して信
じています。

ややもすればマンネリ化に陥り
やすい日常の教育活動の中で、今
一度この青少年赤十字（JRC）活
動と向き合つてみては如何でしょ
うか？「こんな美味しいJRCと
いう果実を一度食べてみません
か？きつと病みつきになり、止め
られなくなると思いませんか？」

編集後記

近年我が国では豪雨や台風など自然
災害が頻発し、しかも激甚化してい
ます。防災つまり「災」を「防」ぐために、
これまでの災害の取組を振り返り検証す
るとともに、治山治水、建造物の耐震
耐火、避難施設設備の整備など社会の
備えをしっかりと行うことが必要です。

しかし、自然災害はごくまれで激しく
なるか分かりません。人間が自然の猛
威を抑え込むことはおのずと限界があ
るのではないのでしょうか。そのため、災
害に備えた国土や町づくりに加え、一人
一人が災害が起こった時に、たぐちに命
を守る行動がとれる能力を身につけるこ
とが大切です。

青少年赤十字が子ども達に身につけて
ほしい態度は「先見」と「気づき・考え」
実行する」です。子ども達が災害を乗
り越えていくためには、事前に災害を学
んで、災害がもたらす危険を予測でき
るようにならないとばかりありません「先見」。
そのうえで、自分が災害に備えて、何を
やるべきか「気づき」考える。そして、
いざという時に、学んだことを思い出し
て自ら命を守るための適切な行動をと
る「実行する」。災害の時、だれかの指
示を待つて行動しては、とても間に合わ
ない時がたくさんあります。自分で考え、
判断して、危険から身を守る行動をと
らなければなりません。この態度は、新
型コロナウイルスへの備えにも通ずるも
ののです。

各学校・園におかれましては、これか
らの時代をいきいきと生きていく子ども
達を育てるために、学校や地域の実情に
合わせて創意工夫を重ね、日々熱心に
教育活動を進めておられます。赤十字
も同様に子ども達には思いやりの心を持
つてたくましく生き抜く力を身につけて
ほしいと願っています。三重県支部では
「出前授業」や資材の貸出などを行つて
います。また、日本赤十字社が作成し
た小學生・中學生・高校生を対象とし
た「まもるいのち ひろめるほづさい」
「保育園・幼稚園を対象とした「ほづさ
いまちがいがし きげんはけんけん」
などの教材も是非「活用ください。」

有功会から
絵本と手洗いキットを
贈呈していただきました。

日本赤十字社三重県支部有功会様（会
長：伊藤歳恭百五銀行頭取）から、青年
赤十字に加盟する幼稚園・保育園に絵本
「くろくまくん あわわわ てあらい」
64冊と日本赤十字社三重県支部へ学校・
園で活用できる手指衛生普及啓発事業
用機器「スタンド型手洗いチェッカー」
5セットが贈呈されました。

絵本は、外で遊ん
だくろくまくんた
ちが主人公です。く
ろくまくんたちは
みんなで「あわわわ
ぶくぶく」手を洗
います。うがいも「ブチュブチュ
グチュグチュ ペット」くろくまくんたち
と一緒に手洗いでうがいが楽しく
なる絵本です。

手洗いチェッカーは、
専用のローションを汚
れに見立てて塗り、手洗
い後に特殊なライトの
下で手をかざすと洗い
残しが光ります。自分の
手洗いを評価することができま
す。

新型「コロナウイルスやインフルエン
ザ、ノロウイルスなどの感染症はくしゃ
み、咳、空気による拡散もありますが、最
も多いのは人の手を介する拡散です。子
ども達には手洗いやうがいの習慣を身
につけていただき、自分とみんなの健康
と安全を守つてほしいと願っています。

なお、手洗いチェッカーは希望する学
校・園に貸し出しますので、詳細は本
誌の4面をご覧ください。

「有功会」とは

有功会とは、日本赤十字
社三重県支部の赤十字
事業及び活動資金に協
力し、赤十字の「人道・博
愛」精神の普及とその事
業に奉仕することとに、
会員相互の親睦を図る
ことを目的とした団体
で、現在130名の会員で
組織しています。





日本赤十字社では皆様の善意に支えられて寄付や様々な募金を受け付けています。

赤十字活動資金

今、この瞬間も、世界中には、自然災害、紛争、飢餓、病気などに苦しんでいる人がたくさんいます。日本赤十字社では、『苦しんでいる人を助けたい』という思いを実現するために、「いのちを救う」「せいかつを支える」「ひとを育てる」の3つの領域で活動しています。

そして、それを9つの形にして事業を展開しています。災害時の医療支援、こころのケア、毛布などの救援物資などの配布などの「国内災害救護」。世界最大のネットワークを活かした「国際活動」。「赤十字病院」の運営。豊かな人間性と看護に関する幅広い知識・能力を備えた「看護師等の教育」。病気の治療などで輸血を必要とする人を救うための「血液事業」。身近な人を救うためのとっさの手当てや日常生活での事故防止など、健康安全に関する知識・技能の普及と啓発をめざした「救急法等の講習」。未来を担う青少年が実践活動を通して自ら『気づき、考え、実行』できる学びの機会を提供する「青少年赤十字」。個人の尊厳を守るための「社会福祉」、困っている・苦しんでいる人の役に立ちたいという思いをもつ皆様と共に行う「赤十字ボランティア」です。

これらの9つの事業は、国や県の補助金などではなく、個人や法人の皆様からの寄付などを財源としています。

赤十字活動資金への寄付は、日本赤十字社の人道的な活動に役立てられています。この寄付はこうした活動の基盤となる大切な寄付です。

国内義援金

大規模な豪雨、台風、大雨、地震などの災害などが起こった時に被災された方々を金銭で支援するために行っています。

日本赤十字社にお寄せいただいた義援金は、被災した都道府県に設置される「義援金配分委員会」に全額送金され、同委員会が定める配分基準に従って、市区町村を通じて被災された方に届けられます。被災された方の数などの情報を正確に把握した後、被災された方の被害状況に応じて、当面の生活を支援するために現金で渡されます。

義援金が日本赤十字社の活動資金や事務経費に使われることは一切ありません。義援金の受付にかかる経費はすべて赤十字活動資金でまかなわれています。

現在受付中の国内義援金につきましては、日本赤十字社のHPをご覧ください。



日本赤十字社が受け付けている寄付や募金について



青少年赤十字活動資金 (通称：1円玉募金)

青少年赤十字では、「子ども達が自分たちのお小遣いの中から出せる金額で奉仕をしよう」と「1円玉募金」を行っています。日ごろのお小遣いを倹約し、世界で苦しんでいる同世代の子ども達のために募金活動をするによって「奉仕」の心を学び、その国の文化や生活に関心を持ち、自ら調べることで「国際理解・親善」を進めます。さらに、支援している国の子ども達の生活などを知ることを通して「健康・安全」についての理解を深めることもできます。

募金の使い道を現地の学校の先生や地域住民、時には行政なども含めて話し合い、その国が本当に必要な形で活用してもらえることが「1円玉募金」の特徴です。実際の活動では、支援対象国の青少年赤十字メンバーが自ら主体的に関わることができます。

この1円玉募金を財源として「青少年赤十字海外支援事業」を行っています。平成29年から3カ年計画で、ヒマラヤ山脈を有するネパールと、南太平洋にあるバヌアツの支援を行い、令和2年からも引き続き3カ年計画で支援を続けています。支援内容などの詳細につきましては、日本赤十字社のHPをご覧ください。



海外救援金

海外で発生した災害や紛争による被災者を支援しています。被災者への医療や衣食住の支援といった緊急支援や復興支援、健康問題に苦しむ人々の状態を改善するための保健衛生活動など、被災国の赤十字社が行う被災者支援活動に役立てられます。

例えば、東日本大震災では、日本赤十字社は海外からの救援金を財源として、生活家電セットの寄贈事業や給水タンクの設置など、被災者の生活再建に役立つさまざまな支援を行いました。

現在受付中の海外救援金につきましては、日本赤十字社のHPをご覧ください。

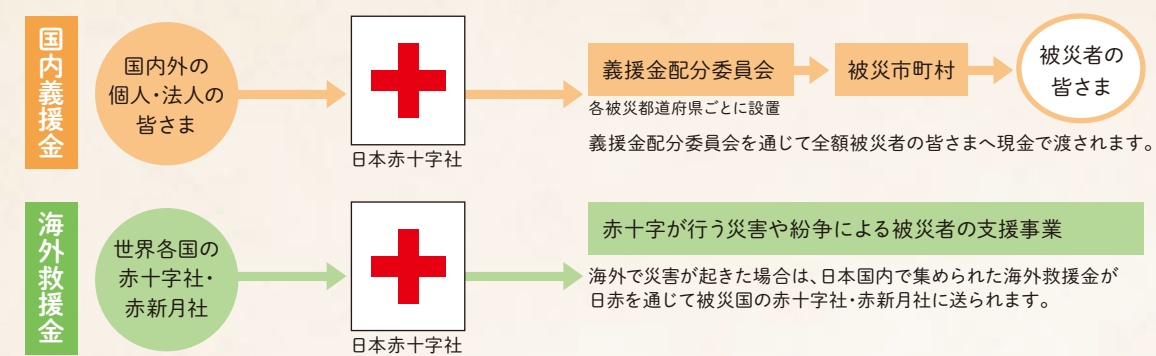
NHK海外たすけあい

日本赤十字社とNHKが毎年12月に実施しています。国際赤十字創設120周年、NHKテレビ放送開始30周年という記念すべき年であった昭和58年(1983年)に始まり、現在まで長きに渡って続いている歴史のある募金キャンペーンです。

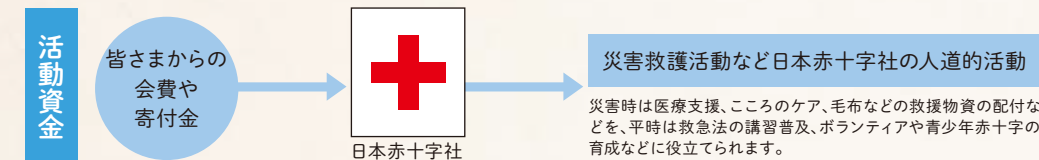
日本赤十字社を通じて、世界各地の紛争や自然災害、感染症などに苦しむ人々のために役立てられます。女性や子どもはもちろん、より幅広い人々に支援を届けるとともに、紛争や自然災害など、様々な人道危機を対象に支援を行っています。

2019年度の支援実績は6億5,656万1,824円です。支援内容などの詳細につきましては、「NHK海外たすけあい」のHPをご覧ください。

義援金や救援金の流れ



活動資金の流れ



本社主催

「国際交流事業」が開催されました。

11月15日、日本赤十字社が隔年で開催している青少年赤十字国際交流事業が、今年は新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインで開催されました。アジア太平洋地域の17の国と地域、国内は41都道府県から、総勢501人の青少年赤十字メンバーや指導者らが参加し、三重県からは7名の高校生が参加しました。



オリエンテーション・オープニングスピーチに続いて、『ふるさと“1品”文化紹介・自己紹介』が5つのグループに分かれて行われました。三重県は第3グループです。山形県、千葉県、奈良県、島根県、岡山県、徳島県、佐賀県、中国、フィジー、ベトナムの皆さんが集まったグ

ループです。三重県のふるさと1品は、三重県立四日市四郷高校の落合海吏さんが三重県の真珠について、三重県産の真珠で作られたネックレスを見せながら英語で紹介しました。

続いて『青少年赤十字活動紹介』がグループで行われ、三重県の紹介は、三重県立木本高校の面那朋香さんが西日本豪雨災害義援金の募金活動について英語で紹介しました。

活動紹介が終わった後、全体会へ戻り、高校生メンバーが考えた赤十字に関する『〇×クイズ』を全員で楽しみました。英語での出題です。「日本では血液事業は赤十字でしか行っていないか?」や「インド赤十字社では献血に関するモバイルアプリを立ち上げようとしているか?」といった質問が出され、メンバーたちはこれまでの知識や各々の動を頼りにクイズに答えていました。

そして、今年度の国際交流のテーマの一つである新型コロナウイルスが取り上げられました。まずニューヨークの病院で働く医師と日本赤十字社職員との対談を通して新型コロナウイルスについての理解を深めたうえで、グループに分かれ、コロナ禍の現状と「差別・偏見のない世界をつくるために自分たちに何ができるか」について意見交換が行われました。



第3グループでは、情報が正しいのか、誰か嫌な思いをしていないか考える。誹謗中傷をしない。見て見ぬふりをするのではなく何か行動に移す。感染予防対策をする。正しい情報を知る力を身につける。国際協力が必要、などの意見が出されました。そしてまとめの段階では、手洗い・消毒に関する予防方法を中心とした正しい知識を習得し、伝達することが必要。ポジティブな思考を持つことや差別から目をそらさない積極性が大切。「Respect each other」(お互いを尊重しあうこと)が大切、といった意見が出されました。

最後に全体会で、5つのグループで話し合われた内容をそれぞれの代表が発表して交流を終えました。終始英語が飛び交う交流会でしたが、参加したメンバーは、国内外の人達と交流できて大変楽しかったと語っていました。



中学生が

国際交流会をオンラインで行いました。



三重県青少年赤十字中学校連絡協議会では、例年各学校の活動交流会と国際交流会を開催していますが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症対策のため一室に会することを止め、オンラインで国際交流会を開催しました。

12月12日、三重県支部に、三重日本語学校で学ぶベトナムとネパールの学生さん3名を招き、三重県立熊野古道センターに集まった尾鷲市立尾鷲中学校の皆さんと交流しました。三重県青少年赤十字指導者協議会青木利斉会長の挨拶、参加者の自己紹介など開会セレモニーに続き、ベトナムとネパールの学生さんからそれぞれの国の紹介、そして尾鷲中学校の皆さ

んから学校や地域の紹介をしていただきました。続いてベトナムとネパールの2グループに分かれて交流を行いました。

始めはオンラインでの交流に戸惑いがあったようにも感じましたが、皆さんが積極的に交流していただきましたので次第に和気あいあいの雰囲気となりました。最後に各グループの交流内容を交流しあって交流会を終えました。

参加した学生の皆さんからはとても楽しい交流会で、自分達の国のことを知ってもらえて大変うれしかったと喜んでいただきました。また、中学生は「文化の違いなど知れて本当に良い経験になりました。また、この

ような機会があれば、ぜひ参加したいと思います。そして、一度ネパールやベトナムを訪れたいです。」と感想を記してくれました。

